

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Commentaries on the Zhongguo xiao xue shi lue (Lu-xun's a brief history of Chinese fiction) (I)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1987-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中嶋, 長文, Nakajima, Osafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2245

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



中國小說史略考證 第一

中 島 長 文

序

『中國小說史略』を読みはじめてから、途中で中斷はあるもののすでに十年になるうか。教室でこの書の講讀に附合わされた學生たちも年々數名でしかなかったが、もうかなりの數にのぼるだろう。教學のかたわら、わたしはこの書を魯迅に就いて、あるいは憑いて讀もうと試みた。成果はここに見るように寥々たるものである。この書の評價はすでに定まっているが、最近、小説史として草創のこの書はもうお蔵に入ってもよいのではないかという議論がある。確かに個別の研究ではこの書を凌駕した部分もあって當然である。なにしろ出版からすでに半世紀以上を經過しているのだから、大器がそろそろ現われても何の不思議もない。しかしわたしの意はそういうところにはない。魯迅が何をどのように讀んでどのようにこれを書いたかを探ることができればそれでよいのである。それでよいことの意味をわたしは知っている。つまりこの作業のかんりの部分はひまがあれば誰にでもできることなのである。もっともこういことができるのは先行する人々の努力の成果があるからであり、さらに加えて中國古籍の復印本の普及のおかげでもあるのだが。

そういうわけでこれは當然のことだが、中國小説史に新たな問題を提起したり、新たな視點を確保することとはまったく關係がない。わたしはこの書を読みつつ魯迅に就く、あるいは憑きたいのである。だが悲しいかな、自分でもその意は壯とするも、學も識もまるで著者には及ばない。憑くにはむろん由ない。それを思えばそれこそ悲涼を益すばかりであるが、これまたいかんともするすべがない。後は諸賢の賜教を俟つのみである。一九八七年六月二十二日北窓の下に記す。

凡 例

一、魯迅自身の小説への言及は『中國小説史略』の理解のためにできるだけ挙げた。主には『中國小説史大略』（これについては後述）および一九二四年七月西安での講演稿である「中國小説的歴史的變遷」（『小説的變遷』と略す）の、『中國小説史略』と對應する部分だが、その他の文章での言及も適宜引用した。なお、増田渉譯『支那小説史』（昭和十年サイレン社）に附けられた注釋は、増田氏が直接魯迅に就いて質したと考えられる部分が多いので、ここから適宜引用する。

二、魯迅が『中國小説史略』（以後『史略』と略す）成稿のために読み、かつそれに據ったと考えられる書物の必要部分を引いた。

三、さらに引用は彼が讀んだと考えられる書物に限定しない。彼の論述を佐證するもの、あるいは反證するものも關連して引くことがある。但し第二項とこの項との間に引用に際して區別はつけていない。

四、『史略』の底本には、人民文學出版社一九八一年版『魯迅全集』第九卷所收のものを用了。これは、この版が現在最も行なわれており、見やすいという便宜的な理由からに過ぎない。但し解釋に關わる部分は、あくまで魯迅の目を通っている一九三五年六月第十版修訂本を基準としなければならない。なお魯迅自身の小説に關する言及も、この『全集』に收録された限りすべてこの版に據った。

五、『史略』各版についてその概略を示しておく。

A、寫印講義本 一九二〇年十二月以降

呂福堂「『中國小説史略』的版本演變」（『魯迅著作版本叢談』書目文獻出版社一九八三）によれば、北大國文系教授會印刷發行、題名を『小説史大略』という。硝酸水溶液を使って毛筆で原紙に書きそれを油印したもの。いま榮太之編校「小説史大略」（『魯迅研究論叢』所收、一九八〇吉林人民出版社）、單演義編校『魯迅小説大略』（一九八一陝西人民出版社）として二本が刊行されている。魯迅はこの年の十二月から北京大學國文系で中國小説史の講義をはじめた。當時はいまのように普通話（共通語）がなく、方言の差が大きいために全國から集まる學生は往々にして講師の話を理解できなかった。そのため講師は「講義」というレジュメに近いものを用意して學生に配った。魯迅のこの『小説史大略』は講義の進行とともに配られたらしく、最初から書物の体裁をとったものではなかった。計十七篇でのちの『史略』に比べて篇數で十一篇少ない。一葉五百字前後で、計百十五頁であるという。

B、鉛印講義本

書名を『中國小説史大略』とする。呂氏（前掲文）によると北京大學印刷科排印。一九二一年下半期から一九二二年の間に發行されたのではないかという。單氏の説（『魯迅小説史大略』附論）では一九二一年一月以降、北京

高等師範学校の發行と推定。全二十六篇と大幅に篇數が増え、『史略』の二十八篇に近くなっているのは寫印本『大略』の各篇を二つに分つて叙述を増したためである。なお、この版では寫印本『大略』、『史略』にともにある第一篇「史家對於小説之著錄及論述」を缺く。一頁四百字前後、計百七十三頁。目錄二頁。

C、新潮社初版本 上下二卷 一九二三年十二月、二四年六月

この版ではじめて『中國小説史略』となった。上冊十五篇、下冊十三篇、計二十八篇。呂氏によれば、鉛印講義本に比して約二萬字の叙述が加えられ、改訂が施された。そして正式に序言と後記が書加えられた。以後の各版は基本的にこの版に據り、部分的に改訂を加えられて行く。

D、北新書局再版合訂本 一九二五年九月

新潮社版の上下二卷を一冊に合訂したもの。序言、目錄十二頁、本文・後記・正誤三五一頁。序言の裏に九月十日附の附記を添え、卷末に正誤表を附す。呂氏によるとやはり初版にいくつかの修訂が加えられているという。

E、同三版本 一九二六年十一月

再版の正誤によって版を改めたが、それ以外にも再版本とは異同がある。校勘に使用した七版（一九三〇年五月）との間にはごく一部組み替えた部分も認められるが、版面から見て三版から七版までは基本的に三版の紙型に據ったと考えられる。再版本に同じく、但し正誤を省くので、序言等十二頁、本文・後記三四八頁。

F、同訂正（初版）本 一九三一年七月

一九三〇年十一月二十五日附の題記が序言の前に附けられ、主に第十四・十五・二十一篇にいささか大きな改訂が施された。再版以来の附識は本文中に書込まれた。この版は重版の數え方からすれば「第八版」でなければなら

ないのだが、訂正が入ったので「初版」とされたのだろう。しかし呂氏に據ればこの紙型で二度重印された書の奥附が「一九三二年七月第八版」「一九三三年三月第九版」だという。題記から後記まで通して全三七四頁。

G、同十版本 一九三五年六月

最後の修訂本といわれるもので、増田渉との手紙の往來によって個別に改訂が加えられた。呂氏はこの版によって一九三六年十月に第十一版が刷られたという。ここではその十一版を校勘に使用したが、その奥附には「（訂正本）一九三六年十月十一版」とあるから第十版もおそらくそれと同じ形式であったのだろう。全書通して三七三頁、これは訂正初版本の最終頁が白紙なのでそれと變らない。以後北新書局から第何版まで出たのか未だ調査が及ばない。

H、魯迅全集出版社『魯迅全集』第九卷本 一九三八年六月

一九八一年版『全集』の「説明」には「一九三五年第十版の時またも個別に改訂がなされ、以後の各版はみな第十版と同じである」とするが、魯迅全集出版社版『全集』編纂の過程で『史略』には少しく校訂者の手が入っており、修訂十版本とは異同がある。

I、魯迅全集出版社『魯迅三十年集』本 一九四一年十月

一九三八年版『全集』に據って組版されたが、時に誤植がある。校訂の上ではあまり寄與するところがない。香港新藝出版社影印本（刊行年不明）がある。

J、人民文學出版社十卷本『魯迅全集』第八卷本 一九五七年十二月

出版説明には「一九三〇年に一度修訂を行ない、それ以後の各版は一九三〇年修訂後の版本と同じである」と言

い、一九三五年の修訂版のことには觸れない。そして「このたびの校勘では、『中國小説史略』は作者が一九三〇年に自ら編校した版本に據った」と述べる。しかしこの『全集』第八卷本は明らかに一九三八年版『全集』本に據ったと考えられる個所があり、「説明」はあまりあてにはならない。無注。

K、人民文學出版社『魯迅全集』第九卷本 一九八一年

詳しい注釋が附いた。本文にはこの考證で明らかになるように校訂者の手が入っている。
他に一九三八年版『全集』の復印版や各『全集』版からの單行があるがすべて省略した。

六、『史略』本文の校勘には五に舉げた各版本のうち次の各版を用いた。

D、北新書局再版合訂本（略して二版）

E、同三版本（略して三版）又同七版本（略して七版）

F、同訂正初版本（略して訂正版）

G、同十一版本（略して十一版）これは第十版の代りに用いた。

H、魯迅全集出版社『魯迅全集』第九卷本（略して三十八年版全集）

I、魯迅全集出版社『魯迅三十年集』本（略して三十年集版）

J、人民文學出版社十卷本『魯迅全集』第八卷本（略して五十七年版全集）

K、人民文學出版社十六卷本『魯迅全集』第九卷本（略して新版全集）

なお、Aの排印本二種（略して『大略』榮校本、單校本）を参考にした。B、C、はともに未見である。

七、魯迅の編輯にかかる次の書はそれぞれ下記の版本に據る。

『古小説鈎沈』 三十八年版全集第八卷およびそれによる單行本

『小説備校』 一九四六年『魯迅全集補遺續編』

『唐宋傳奇集』 三十八年版全集第一〇卷また古典文學出版社版

『小説舊聞鈔』 三十八年版全集第一〇卷

八、次の各書よりの引用は通常下記の版本による。

二十四史 中華書局校點本

『全上古三代秦漢三國六朝史』 中華書局景印本

『藝文類聚』 中華書局排印本

『太平御覽』 中華書局景印四部叢刊本

『太平廣記』 中華書局排印本

九、頻出する藝文・經籍志は次のように略記する。

『漢書』藝文志↓『漢志』 『隋書』經籍志↓『隋志』 『舊唐書』經籍志↓『舊唐志』 『新唐書』藝文志↓『新唐

志』 以下正史はこれに倣う。

十、『史略』本文の轉記は紙幅の都合でできないので、見出しには最初と最後の一句を擧げた。そして見出しの各條の上に檢索番號を附けた。なお、参照のための條項がその一篇の内ではなく他篇にわたるばあい、たとえば第一篇の中で第三篇の第十五條に言及するときには、檢索番號を「3—15」と標記する。

十一、見出し項目の末尾に附けた數字は、その見出しの最初の一句が現われる底本『史略』新全集第九卷の頁數と行數

である。たとえば「五十六」は、第五頁の本文の六行目、「三―七」は、第一二二頁の本文の下から七行目をそれぞれ示す。

十二、『史略』の各篇に對應する「目錄・著錄・參考篇」とも言うべきものを作りつつあるが、紙幅の關係で附載することができない。

第一篇 史家對於小説之著錄及論述

1 小説之名、以至（『莊子』外物）

五十一

「小説的變遷」第一講云、考小説之名、最古是見于莊子所說的「飾小説以干縣令」。「縣」是高、言高名、「令」是美、言美譽。但這是指他所謂瑣屑之言、不關道術的而說、和後來所謂的小説并不同。因爲如孔子、楊子、墨子各家的學說、從莊子看來、都可以謂之小説。反之、別家對莊子、也可稱他的著作爲小説。至于『漢書』藝文志上說「小説者、街談巷語之說也。」這纔近似現在的小説了、但也不過古時稗官采集一般小民所談的小話、借以考察國之民情、風俗而已、并無現在所謂小説之價值。

『中國小説史略』増田涉日譯本注云、縣令。縣は懸で、高く懸る意。令は美。縣令は即ち高名美譽のこと。

『莊子』雜篇外物云、任公子得若魚、離而腊之。自制河以東、蒼梧已北、莫不厭若魚者。已而後世衒才諷說之徒、皆驚而相告也。夫揭竿纍、趣灌瀆、守鮓鮒、其于得大魚難矣。飾小説以干縣令、其于大達亦遠矣。是以未嘗聞任氏之風俗、其不可與經于世亦遠矣。唐成玄英疏、干、求也。縣、高也。夫修飾小行、矜持言說、以求高名令問者、必不能大

通于至道。字作縣字、古懸字多不著心。

2 桓譚言、以至背于儒術者矣

五十三

『文選』卷三一、江淹『雜體詩三十首』之「李都尉」云、袖中有短書、願寄雙飛燕。〔李善注〕桓子新論曰、若其小說家合叢殘小語、近取譬論、以作短書、治身理家、有可觀之辭。孫馮翼輯本、嚴可均輯『全後漢文』ともにこの條を引かない。

『太平御覽』卷六〇二云、桓譚新論曰、楊子雲才智開達、卓絕於衆。漢興以來、未有此也。國師子駿曰、何以言之。答曰、才通著書以百數、惟太史公廣大。其餘叢殘小論、不能比之子雲所造法言太玄經也。人貴所聞、賤所見、故輕易之。若遇上好事、必以太玄次五經也。

『論衡』卷二八、書解篇云、或曰、古今作書者非一、各穿鑿失經之實、傳達聖人質、故謂之叢殘、比之玉屑。故曰、叢殘滿車、不成爲道、玉屑滿篋、不成爲寶。前人近聖、猶爲叢殘、況遠聖從後復重爲者乎。其作必爲妄、其言必不明、安可采用而施行。

『師弟答問集』六頁云、殘叢。新論ハ種々ノ刊本アリ、叢殘ト顛倒シテ居ルモノモアルデショウ。小説史略ノ方ハ或ル類書カラ引イテ來タノデスカラ其ノ尽ニシタ方ガヨイ。又書信三三〇六二五―増田涉宛新版全集第十三

右の書簡中「新論」とするのはおそらく「文選」の筆誤であろう。胡氏本系統のは「叢殘」「譬論」に作るが、汲古閣本系は「殘叢」「比論」に作る。魯迅の見たのは汲古閣本の系統のものである。また類書から引いたと言うのは、次條の「短書不可用」の部分と混同したものか。

3 『莊子』云堯問孔子云云

五十五

『太平御覽』卷六〇二云、新論曰、余爲新論、術辨古今、亦欲興治也。何異春秋褒貶耶。今有疑者、所謂蚌異蛤、二

五爲非十也。譚見劉向新序、陸賈新語、乃爲新論。莊周寓言乃云、堯問孔子、淮南子云、共工爭帝、地維絕。亦皆爲妄作。故世人多云、短書不可用。然論天間、莫明於聖人、莊周等雖虛誕、故當採其善。何云盡棄耶。

「堯問孔子」は今本『莊子』に見えない。

『淮南子』原道訓云、昔共工之力觸不周之山、使地東南傾。與高辛爭爲帝、遂潛于淵、宗族殘滅、繼嗣絕祀。

又天文訓云、昔者共工與顓頊爭爲帝、怒而觸不周之山、天柱折、地維絕、天傾西北、故日月星辰移焉。地不滿東南、故水潦塵埃歸焉。

『論衡』謝短篇云、彼人〔儒生〕曰、二尺四寸、聖人文語。朝夕講習、義類所及、故可務知。漢事未載於經、名爲尺籍短書、比於小道、其能知、非儒者之貴也。

又骨相篇云、……斯十二聖者、皆在帝王之位、或輔主憂世、世所共聞、儒所共說、在經傳者、較著可信。若夫短書俗記、竹帛胤文、非儒者所見、衆多非一。蒼頡四目爲黃帝史。春秋孔演圖、書傳。晉公子重耳叱脇爲諸侯霸。左傳僖二十三年傳、國語晉語。蘇秦骨鼻爲六國相。張儀叱脇亦相秦魏。項羽重瞳云虞舜之後、河圖、史記項羽本紀。與高祖分王天下。陳平貧而飲食不足、貌體佼好、而衆人怪之曰、平何食而肥。史記陳丞相世家。及韓信爲滕公所鑒、免於鈇質、亦以面狀有異。面壯肥佼、亦一相也。

4 緣自來論斷藝文、本亦史官之職也

冒頭より此に至る一段、『大略』にはない。

5 秦既燔滅文章以愚黔首、以至得十五家

『大略』一云、漢孝武建藏書之策、置寫官、詔劉向校經傳諸子詩賦、向輒條其篇目、撮其指意、錄而奏之。向卒、哀

帝復使其子歆卒父業。歆於是總群書、而奏其七略。七略今亡。班固作漢書、刪其要爲藝文志。漢書藝文志所錄小說、有十五家。「史略」「大略」ともに「而奏其七略」までは「漢志」叙録による。

『漢志』叙録云、昔仲尼沒而微言絕、七十子喪而大義乖。故春秋分爲五、詩分爲四、易有數家之傳。戰國從衡、眞僞分爭、諸子之言紛然轂亂。至秦患之、乃燔滅文章、以愚黔首。漢興、改秦之敗、大收篇籍、廣開獻書之路。迄孝武世、書缺簡脫、禮壞樂崩、聖上喟然而稱曰、「朕甚閔焉。」於是建藏書之策、置寫書之官、下及諸子傳說、皆充祕府。至成帝時、以書頗散亡、使者陳農求遺書於天下。詔光祿大夫劉向校經傳諸子詩賦、步兵校尉任宏校兵書、太史令尹咸校數術、侍醫李柱國校方技。每一書已、向輒條其篇目、撮其指意、錄而奏之。會向卒、哀帝復使向子侍中奉車都尉歆卒父業。歆於是總羣書而奏其七略、故有輯略、有六藝略、有諸子略、有詩賦略、有兵書略、有方技略。今刪其要、以備篇籍。

〔一〕李奇曰：「隱微不顯之言也。」師古曰：「精微要妙之言耳。」〔二〕師古曰：「七十子、謂弟子達者七十二人。舉其成數、故言七十。」〔三〕韋昭曰：「謂左氏、公羊、穀梁、鄒氏、夾氏也。」〔四〕韋昭曰：「謂毛氏、齊、魯、韓。」〔五〕師古曰：「從音子容反。」〔六〕師古曰：「穀、雜也。」〔七〕師古曰：「燔、燒也。秦謂人爲黔首、言其頭黑也。燔音扶元反。黔音其炎反、又音琴。」〔八〕師古曰：「編、綴也。綴音吐活反。」〔九〕師古曰：「喟、歎息之貌也。音丘位反。」〔一〇〕如淳曰：「劉歆七略曰「外則有太常、太史、博士之藏、內則有延閣、廣內、祕室之府。」〔一一〕師古曰：「占卜之書。」〔一二〕師古曰：「醫藥之書。」〔一三〕師古曰：「已、畢也。」〔一四〕師古曰：「撮、總取也。音干括反。」〔一五〕師古曰：「卒、終也。」〔一六〕師古曰：「輯與集同、謂諸書之總要。」〔一七〕師古曰：「六藝、六經也。」〔一八〕師古曰：「刪去浮冗、取其指要也。其每略所條家及篇數、有與總凡不同者、轉爲〔寫〕脫誤、年代久遠、無以詳知。」

『漢志』諸子略小序云、諸子十家、其可觀者九家而已。皆起於王道既微、諸侯力政、時君世主、好惡殊方、是以九家之術、蠡出並作、各引一端、崇其所善、以此馳說、取合諸侯。其言雖殊、辟猶水火、相滅亦相生也。仁之與義、敬之與和、相反而皆相成也。易曰、「天下同歸而殊塗、一致而百慮。」今異家者各推所長、窮知究慮、以明其指、雖有蔽短、合其

要歸、亦六經之支與流裔。^{〔5〕}使其人遭明王聖主、得其所折中、皆股肱之材已。^{〔6〕}仲尼有言、「禮失而求諸野。」^{〔7〕}方今去聖久遠、道術缺廢、無所更索、^{〔8〕}彼九家者、不猶淪於野乎。^{〔9〕}若能修六藝之術、而觀此九家之言、舍短取長、則可以通萬方之略矣。^{〔10〕}

〔1〕師古曰：「好音呼到反。惡音一故反。」〔2〕師古曰：「遠與鋒同。」〔3〕師古曰：「辟讀曰譬。」〔4〕師古曰：「下繫之辭。」〔5〕師古曰：「裔、衣末也。其於六經、如水之下流、衣之末裔。」〔6〕師古曰：「已、語終辭。」〔7〕師古曰：「言都邑失禮、則於外野求之、亦將有獲。」〔8〕師古曰：「索、求也。」〔9〕師古曰：「瘞與愈同。愈、勝也。」〔10〕師古曰：「舍、廢也。」

6 『宋子』十八篇。（孫卿道宋子、其言黃老意。）

六十五

班固の注に、二版から三八年版全集に至るまですべて「孫卿道『宋子、其言黃老意。』」と括號を附ける。これに據れば魯迅は宋子以下全体を荀子の言葉と解した。新版全集が括號をはずしたのは現行本『荀子』（3—18 参照）にそうした文句が見えないためだろうが、前後の班固の注の書きかたから考えても、その方が正しいと思われる。

7 『天乙』三篇。（天乙謂湯、其言殷時者、皆依托也。）

六十六

『大略』からはじまって十一版に至る各版すべて「其言者殷時」に作るのを、三八年版全集に至ってはじめて「其言殷時、者皆依托也」とし句讀を誤植する。三十年集版また句讀の誤りまで襲い、五七年版全集に至って「其言殷時者、皆依托也」となる。しかしこれは三八年版全集校訂者が意を以て改めたのであって、このように作る『漢志』のテキストはない。『漢志』は百衲本から殿本まですべて「其言非殷時」に作る。しかし「官本考證」は「非監本訛者、今改正」と言う。ただわたしの見た嘉靖八年刊萬曆十年二十六年補刊監本は「其言非殷時」と作り訛してないが、「官本考證」に據れば魯迅の見た『漢志』は監本系のものである。次の『臣饒心術』の注末に「也」字を缺くのは監本、評林本、殿本であることも一傍證になろうか。志からの引用はむろん各代異なる版本に據ったことも考えられ

ないわけではない。しかし魯迅が『大略』『史略』で引く各代志を通して見たばあい、どうやら彼は『八史經籍志』に據っているらしいのである。『八史經籍志』は日本で編纂され逆輸出されたものだが、これは監本に據っている。それにはまさしく「其言者、殷時」とあり、『心術』注末も「也」字を缺く。また『隋志』の「訓方氏」も「職方氏」に作る。さらに『新唐志』の「劉泳、因果記十卷」は前の監本では「劉泳」、和刻本も同じくまぎらわしい文字に作るが、『八史經籍志』本では「劉洙」とする。これは『大略』に引く所と一致する。この他『大略』の誤植か筆誤と思われる部分以外はほとんど『八史經籍志』本と魯迅所引とは一致する。

なお、『魯迅手蹟和藏書目錄』（一九五九年魯迅博物館編）は『八史經籍志』光緒九年張壽榮刊本一部を著録するが、これは一九二六年十月二十五日上海の周建人に託して購入したもので、『史略』『大略』の起稿とは直接の關係はない。

8 『虞初周說』、以至本自虞初者也

六一九

『史記』卷二、孝武本紀云、……太初元年。是歲西伐大宛。蝗大起。丁夫人、雒陽虞初等以方祠詛匈奴、大宛焉。又『史記』二八封禪書に同じ表現が見える。『漢書』郊祀志の記述も變らない。

張衡「西京賦」「文選」卷二云、匪唯翫好、乃有秘書、小説九百、本自虞初。薛綜注、小説、醫巫厭祝之術。凡有九百四十三篇、言九百、舉大數也。善曰、漢書曰、虞初周說九百四十三篇。初、河南人也。武帝時、以方士侍郎、乘馬衣黃衣、號黃車使者。小説家者流、蓋出於稗官。應劭曰、其說以周書爲本。從容之求、寔俟寔儲。薛綜注、持此秘術、儲以自隨、待上所求問、皆常具也。善曰、尚書曰、從容以和。爾雅曰、俟、待也。說文曰、儲、具也。

9 小説家者流、蓋出於稗官

六一三

『大略』も『漢志』小説家の全文を引くが、この部分は顔師古の注をも含めて引く。

如淳曰、「稗音鍛家排。九章『細米爲稗』。街談巷説、其細碎之言也。王者欲知閭巷風俗、故立稗官使稱説之。今世亦謂偶語爲稗。」師古曰、「稗音稊稗之稗、不與鍛排同也。稗官、小官。漢名臣奏唐林請省置吏、公卿大夫至都官稗官各減什三、是也。」

10 是以君子弗爲也

六一

『大略』も師古注は引かない。師古曰、「論語載孔子之言。泥、滯也、音乃細反。」現行の『論語』子張篇には「雖小道」よりこの句まで子夏の言葉として出る。魯迅が孔子の言葉として一句前の「致遠恐泥」で句讀を切るのは、後出の『隋志』小序の記述に引かれたためか。15 參看。『史略』再版合訂本よりすでにそうである。

11 右所錄十五家、以至記事者近史而悠繆者也

七十二

『大略』一云、漢書所錄十五家、至梁僅存青史子一卷。及隋青史子亦佚盡。

下條15に引く『隋志』小説家類『燕丹子』注を參看。

中國小説史の記述を『漢志』から始めるのは、わが國の學者による文學史にその先例がある。藤田豊八の『支那文學史』の小説史の部分がそうである。先秦のものと漢代のものとを二つに分けて、胡應麟の説を援用して説いている。

藤田の書は早稻田大學の前身、東京專門學校の講義録で過眼のものには奥附はないが、その年號表が一八九五年、光緒二十一年は我が明治二十八年に相當するという記述で終るので、一八九五年以後の出版であるにちがいない。なおこの書の記述は後漢末までなので、小説史も始まりの部分しかない。ただその記述は、後の早稻田大學の久保得二『支那文學史』の小説史の最初の部分に襲われ、引いては鹽谷溫『支那文學概論講話』にも影響を與えているのではない

かと考えられる。

12 唐貞觀中、長孫無忌等修『隋書』、經籍志撰自魏徵

七十五

『四庫提要』卷四五云、隋書八十五卷唐徵等奉敕撰。貞觀三年、詔徵等修隋史。十年成紀傳五十五卷。十五年又詔修梁陳齊周隋五代史志。顯慶元年、長孫無忌上進。據劉知幾史通所載、撰紀傳者爲顏師古、孔穎達。撰志者爲于志寧、李淳風、韋安仁、李延壽、令狐德棻。案宋刻隋書之後有天聖中校正舊跋、稱同修紀傳者尚有許敬宗、同修志者尚有敬播。至每卷分題、舊本十志內惟經籍題侍中鄭國公魏徵撰。五行志序、或云褚遂良作。紀傳亦有題太子少師許敬宗撰者。今從衆本所載、紀傳題以徵、志題以無忌云云。是此書每卷所題撰人姓名、在宋代已不能盡一。至天聖中重刊、始定以領修者爲主、分題徵及無忌也。

『史通』古今正史篇云、……皇家貞觀初勅中書侍郎顏師古、給事中孔穎達共撰成隋書五十五卷。與新撰周史並行於時。初太宗以梁陳及齊周隋氏並未有書、乃命學士分修、事具於上。仍使秘書監魏徵總知其務。凡有議論、徵多預焉。始以貞觀三年創造、至十八年方就。合五代紀傳并目錄、凡二百五十二卷。書成下於史閣。唯有十志、斷爲三十卷。尋擬續奏、未有其文。又詔左僕射于志寧、太史令李淳風、著作郎韋安仁、符璽郎李延壽同撰。其先撰史人、唯令狐德棻重預其事。太宗崩後、刊勒始成。其篇第雖編入隋書、其實別行。俗呼爲五代史志。

清姚振宗『隋書經籍志考證』叙錄云、按本志天聖以前本題唐侍中鄭國公臣魏徵等撰。今本題唐太尉揚州都督監修國史上柱國趙國公臣長孫無忌等撰。按李延壽上表言、十志是臣所修。此斷非虛語。舊唐書言、延壽受詔、與敬播同修、亦斷非虛事。史通云、太宗使魏徵總知其務。凡有贊論、徵多預焉。此言五史紀傳之論贊、與本志或不相涉。至唐經籍志言、開元三年整比內庫書籍、所用書序、咸取魏文貞、所分書類、皆據隋書經籍志。斯則明言魏文貞撰書序矣。書序者

卽本志大小序四十八篇、猶紀傳之有論贊也。大抵是志初修於李延壽敬播有網羅彙聚之功、刪訂於魏鄭公有披荆剪棘之實。撰人可考見者凡三人。舊本題魏徵等撰、實可信也。

魯迅が『隋書』『經籍志』撰自魏徵」とするのは、『舊唐志』叙録の記述を引用する右の姚振宗『隋志考證』に據るものと思われる。『四庫提要』によれば魏徵等の撰した「隋史」は貞觀十三年（六三九）に成り、『史通』によれば、いわゆる「五代史紀傳」はさらに五年遅れて貞觀十八年（六四四）に「隋史」をも含む全書が完成している。ところが魏徵は「隋史」の完成は見たものの貞觀十七年（六四三）に卒したから「五代史紀傳」のすべての完成を見ていない。そしていわゆる『五代史志』はかれが卒した翌年、つまり『五代史紀傳』の完成した貞觀十八年に修志の詔敕が降り、十二年を費して、次代の元宗顯慶元年（六五六）に成ったという。したがってふつうに考えれば魏徵が死後に『五代史志』の一部である『隋志』を撰したり刪訂したりすることはあり得ない。また「其文」がないのに「叙録」の類が預め魏徵によって書かれていたとも考えにくい。さらに姚振宗が證據としている母瓊の「古今書録序」（下條16に引く「舊唐書經籍志序」に見える）にいう「所用書序、咸取魏文貞、所分書類、皆據隋書經籍志」は、一見確かに魏徵が書序を書いたというように見える。しかしここは要するに書籍整理の實情が『隋志』の範圍を出ないことを言うのであるから、その筆法から見るに、この句は決して書序が魏徵の手になるかどうかというような細部の事實を言うのではなく、魏文貞とは『隋志』を含む『隋書』全体を代表する撰者として擧げられただけではないかと思われる。また、舊本十志のうち經籍志のみに魏徵撰とあったというのも、後人の「古今書録序」の読みちがいから起ったことではなからうか。ただ魏徵は唐初の書籍蒐收整備の責任者であったことなどから、魏徵が『隋志』の材料となるようなものを書いていなかったとは斷定できない。ともかく『隋書』の成立年代については、『唐會要』の記事も

『史通』などといちがうのでよく分らない。ただ現在の通説に従えば、長孫無忌撰とするか、實際の撰者たちを言うならば于志寧、李淳風等撰とすべきところである。

13 祖述晉荀勗『中經簿』而稍改變、爲經史子集四部、小說故隸于子

七十六

『隋志』叙錄云、魏氏代漢、采掇遺亡、藏在秘書中外三閣。魏秘書郎鄭默、始制中經、秘書監荀勗、又因中經、更著新簿、分爲四部、總括羣書。一曰甲部、紀六藝及小學等書。二曰乙部、有古諸子家、近世子家、兵書、兵家、術數。三曰丙部、有史記、舊事、皇覽簿、雜事。四曰丁部、有詩賦、圖譜、汲冢書。大凡四部合二萬九千九百四十五卷。但錄題及言、盛以縹囊、書用緗素。至於作者之意、無所論辯。惠、懷之亂、京華蕩覆、渠閣文籍、靡有孑遺。

又云、大唐武德五年、克平僞鄭、盡收其圖書及古跡焉。命司農少卿宋遵貴載之以船、泝河西上、將致京師。行經底柱、多被漂沒、其所存者、十不一二。其目錄亦爲漸滯、時有殘缺。今考見存、分爲四部、合條爲一萬四千四百六十六部、有八萬九千六百六十六卷。其舊錄所取、文義淺俗、無益教理者、並刪去之。其舊錄所遺、辭義可采、有所弘益者、咸附入之。遠覽馬史班書、近觀王阮志錄、挹其風流體制、削其浮雜鄙俚、離其疏遠、合其近密、約文緒義、凡五十五篇、各列本條之下、以備經籍志。

14 其所著錄、以至仍襲『漢書』藝文志

七十七

『大略』一云、唐修隋書、小說之著錄於經籍志者、燕丹子而外、無晉以前書、而所論列仍襲班固之說。このあと『隋志』小説家の部分を小序とともに引く。次條所引の『隋志』を參看。

15 小説者、街談巷語之說也、以至致遠恐泥

七十八

『隋志』子部小説家云、

燕丹子一卷丹、燕王喜太子。梁有青史子一卷、又宋玉子一卷、錄一

卷、楚大夫宋玉撰、羣英論一卷、郭頒撰、語林十卷、東晉處士裴啓

撰。亡。

雜語五卷

郭子三卷東晉中郎郭澄之撰。

雜對語三卷

要用語對四卷

文對三卷

瑣語一卷梁金紫光祿大夫顧協撰。

笑林三卷後漢給事中郎鄆淳撰。

笑苑四卷

解頤二卷陽玠松撰。

世說八卷宋臨川王劉義慶撰。

世說十卷劉孝標注。梁有俗說一卷、亡。

右二十五部、合一百五十五卷。

小說者、街說巷語之說也。傳載興人之誦、詩美詢于芻蕘。古者聖人在上、史爲書、誓爲詩、工誦箴諫、大夫規誨、士傳言而庶人謗。孟春、徇木鐸以求歌謠、巡省觀人詩、以知風俗。過則正之、失則改之、道聽塗說、靡不畢紀。

小說十卷梁武帝勅安右長史殷芸撰。梁目、三十卷。

小說五卷

邇說一卷梁南臺治書伏挺撰。

辯林二十卷蕭貢撰。

辯林二卷席希秀撰。

瓊林七卷周獸門學士陰顯撰。

古今藝術二十卷

雜書鈔十三卷

座右方八卷庾元威撰。

座右法一卷

魯史敬器圖一卷儀同劉徵注。

器準圖三卷後魏丞相士曹行參軍信都芳撰。

水節一卷

周官、誦訓「掌道方志以詔觀事、道方憲以詔辟忌、以知地俗」、而訓方氏「掌道四方之政事、與其上下之志、誦四方之傳道而觀衣物」、是也。孔子曰、「雖小道、必有可觀者焉、致遠恐泥。」

『大略』は「解頤」の撰者「陽玠松」を「楊松玠」に作る。八史經籍志本、百衲本、監本、汲古閣本、武英殿本みな同じく「楊松玠」に作る。なお『通説』の「伏挺」を「伏僎」（各本「伏種」）に作るが、これは筆誤の可能性がある。また各本はすべて「街説巷語」に作るが、『大略』すでに「街談巷語」に作り、『史略』各版みなそれを襲う。

「以詔辟忌」の下、『史略』「以知地俗」の四字を脱するが、『大略』は落さない。「訓方氏」は『大略』『史略』ともに「職方氏」に作る。これは『周禮』に従えば「訓方氏」でなければならぬが、八史經籍志本、監本、殿本ともに「職方氏」に作る。これは『大略』『史略』ともに「其衣物」に作るが、各本みな「其」字なく、衍字であろう。

『春秋左氏傳』傳公二八年四月云、聽輿人之誦、曰原田每每、舍其舊而新是謀。

又襄公三十年十月云、從政一年、輿人誦之。曰、取我衣冠而褚之。取我田疇而伍之。孰殺子產。吾其與之。及三年又誦之。曰、我有子弟。子產誨之。我有田疇。子產殖之。子產而死。誰其嗣之。

『詩經』大雅板云、我言維服、勿以爲笑。先民有言、詢于芻蕘。毛傳云、芻蕘、薪采者。鄭箋云、古之賢者有言、有疑事當與薪采者謀之。匹婦匹夫、或知及之、況於我乎。

『春秋左氏傳』襄公二四年云、師曠侍於晉侯。晉侯曰、衛人出其君、不亦甚乎。對曰、或者其君實甚。良君將賞善而刑淫、養民如子、蓋之如天、容之如地。民奉其君、愛之如父母、仰之如日月、敬之如神明。畏之如雷霆。其可出乎。夫君神之主、而民之望也。若困民之主、匱神乏祀。百姓絕望、社稷無主、將安用之。弗去何爲、天生民而立之君、使司牧之、勿使失性。有君而爲之貳、使師保之、勿使過度。是故天子有公、諸侯有卿、卿置側室、大夫有貳宗、士有朋

友、庶人工商阜隸牧圉皆有親暱、以相輔佐也。善則賞之、過則匡之、患則救之、失則革之。自王以下、各有父兄子弟、以補察其政。史爲書、贊爲詩、工誦箴諫、大夫規誨、士傳言、庶人謗、商旅于市、百工獻藝。故夏書曰、道人以木鐸徇於路。官師相規、工執藝事以諫。正月孟春、於是乎有諫失常也。天之愛民甚矣。豈其使一人肆於民上、以從其淫、而棄天地之性。必不然矣。

『尙書』僞古文風征云、每歲孟春、道人以木鐸徇于路、官師相規、工執藝事以諫、其或不恭、邦有常刑。

『周禮』天官小宰云、正歲帥治官之屬、而觀治象之法、徇以木鐸、曰、不用濃者、國有常刑。

又地官誦訓云、誦訓、掌道方志以詔觀事、掌道方應以詔辟忌、以知地俗。王巡守、則來王車。

又夏官訓方云、訓方氏、掌道四方之政事、與上下之志、誦四方之傳道、正歲則布而訓四方、而觀新物。

16 石晉時、以至至是乃入小說

『大略』一云、宋劉昫等修唐書、其經籍志以唐之古今書錄爲本、與隋書經籍志無甚異。この後『舊唐志』小説家の部分を引く。

『郡齋讀書志』卷二上云、唐書二百卷。右石晉劉昫張昭遠等撰、因韋述舊史增損以成、繁略不均、校之實錄、多所漏闕。又是非失實。其甚至以韓愈文章爲大疵繆。故仁宗刪改、蓋亦不可已焉。

『舊唐志』敘錄云、開元三年、左散騎常侍褚无量、馬懷素侍宴、言及經籍。玄宗曰、「內庫皆是太宗高宗先代舊書、常令宮人主掌、所有殘缺、未遑補緝、篇卷錯亂、難於檢閱。卿試爲朕整比之。」至七年、詔公卿士庶之家、所有異書、官借繕寫。及四部書成、上令百官入乾元殿東廊觀之、無不駭其廣。九年十一月、殷踐猷、王愐、韋述、余欽、毋昉、劉彥真、王灣、劉仲等重修成羣書四部錄二百卷、右散騎常侍元行沖奏上之。自後毋昉又略爲四十卷、名爲古今書

錄、大凡五萬一千八百五十二卷。祿山之亂、兩都覆沒、乾元舊籍、亡散殆盡。肅宗代宗崇重儒術、屢詔購募。文宗時、鄭覃侍講禁中、以經籍道喪、屢以爲言。詔令祕閣搜訪遺文、日令添寫。開成初、四部書至五萬六千四百七十六卷。及廣明初、黃巢干紀、再陷兩京、宮廟寺署、焚蕩殆盡、曩時遺籍、尺簡無存。及行在朝諸儒購輯、所傳無幾。昭宗卽位、志弘文雅。祕書省奏曰、「當省元學四部御書十二庫、共七萬餘卷。廣明之亂、一時散失。後來省司購募、尙及二萬餘卷。及先朝再幸山南、尙存一萬八千卷。竊知京城制置使孫惟晟收在本軍、其御書祕閣見充教坊及諸軍人占住。伏以典籍國之大經、祕府校讐之地、其書籍並望付當省校其殘缺、漸令補輯、樂人乞移他所。」從之。及遷都洛陽、又喪其半。平時載籍、世莫得聞。今錄開元盛時四部諸書、以表藝文之盛。

又云、昃等撰集、依班固藝文志體例、諸書隨部皆有小序、發明其指。近史官撰隋書經籍志、其例亦然。竊以紀錄簡編異題、卷部相、序述無出前修。今之殺青、亦所不取、但紀部帙而已。而昃等所序四部都錄以明新修之旨、今略載之。

竊以經墳浩廣、史圖紛博、尋覽者莫之能徧、司總者常苦其多、何暇重屋複牀、更繁其說。若先王有闕典、上聖有遺事、邦政所急、儒訓是先、宜垂教以作程、當闡規而開典、則不遑啓處、何獲宴寧。曩之所修、誠惟此義、然禮有未愜、追怨良深。于時祕書省經書、實多亡闕、諸司墳籍、不暇討論。此則事有未周、一也。其後周覽人間、頗覩闕文、新集記貞觀之前、永徽已來不取、近書採長安之上、神龍已來未錄。此則理有未弘、二也。書閣不徧、事復未周、或不詳名氏、或未知部伍。此則體有未通、三也。書多闕目、空張第數、旣無篇題、實乖標榜。此則例有所虧、四也。所用書序、咸取魏文貞、所分書類、皆據隋經籍志。理有未允、體有不通。此則事實未安、五也。昔馬談作史記、班彪作漢書、皆兩葉而僅成。劉歆作七略、王儉作七志、踰二紀而方就。孰有四萬卷目、二千

部書、名目首尾、三年便令終竟、欲求精悉、不其難乎。所以常有遺恨、竊思追雪。乃與類同契、積思潛心、審正舊疑、詳開新制。永徽新集、神龍近書、則釋而附也。未詳名氏、不知部伍、則論而補也。空張之目、則檢獲便增、未允之序、則詳宜別作。紕繆咸正、混雜必刊。改舊傳之失者、三百餘條、加新書之目者、六千餘卷。凡經錄十二家、五百七十五部、六千二百四十一卷。史錄十三家、八百四十部、一萬七千九百四十六卷。子錄十七家、七百五十三部、一萬五千六百三十七卷。集錄三家、八百九十二部、一萬二千二十八卷。凡四部之錄四十五家、都管三千六十部、五萬一千八百五十二卷、成書錄四十卷。其外有釋氏經律論疏、道家經戒符籙、凡二千五百餘部、九千五百餘卷。亦具翻譯名氏、序述指歸、又勒成目錄十卷、名曰開元內外經錄。若夫先王祕傳、列代奧文、自古之粹籍靈符、絕域之神經怪牒、盡載於此二書矣。

夫經籍者、開物成務、垂教作程、聖哲之能事、帝王之達典。而去聖已久、開鑿遂多、苟不剖判條源、甄明科部、則先賢遺事、有卒代而不聞、大國經書、遂終年而空泯。使學者孤舟泳海、弱羽憑天、銜石填溟、倚杖追日、莫聞名目、豈詳家代。不亦勞乎。不亦弊乎。將使書千帙於掌眸、披萬函於年紀、覽錄而知旨、觀目而悉詞、經墳之精術盡探、賢哲之睿思咸識、不見古人之面、而見古人之心、以傳後來、不其愈已。

其序如此。與等四部目及釋道目、並有小序及注撰人姓氏、卷軸繁多、今略之。但紀篇部、以表我朝文物之大。後略。

又子部小說家類云、

鸞子一卷鸞熊撰。

燕丹子三卷燕太子撰。

笑林三卷邯鄲淳撰。

博物志十卷張華撰。

郭子三卷郭澄之撰、賈泉注。

世說八卷劉義慶撰。

續世說十卷劉孝標撰。

辨林二十卷蕭實撰。

小說十卷劉義慶撰。

酒孝經一卷劉炫定撰。

小說十卷殷芸撰。

座右方三卷庾元威撰。

釋俗語八卷劉勰撰。

啓顏錄十卷侯白撰。

右小說家十三部、凡九十卷。

17 宋皇祐中、以至例乃愈焚

七一

『大略』一云、歐陽修等修唐書、藝文志中小說二類、六朝人之著作大增。此諸小說者、隋書及劉昫唐書多在史部雜傳類、至是乃以虛妄而黜之。

『郡齋讀書志』卷二上云、新唐書二百二十五卷。右皇朝、嘉祐中、曾公亮等被詔刪定、歐陽修撰紀志、宋祁撰列傳。舊者約一百九十萬、新書約一百七十四萬。而其中增表。故書成上於朝、自言曰、其事則增於前、其文則省於舊也。而議者頗謂、永叔學春秋、每務褒貶、子京通小學、唯刻意文章。采雜說既多、往往抵牾、有失實之歎焉。

『直齋書錄解題』卷四云、新唐書二百二十五卷、初慶歷中詔王堯臣、張方平等刊修、久而未就。至和初、乃命修爲紀志、祁爲列傳、范鎮、王疇、宋敏求、呂夏卿、劉義叟同編修。嘉祐五年上之。

これによれば慶歷年間（一〇四一—四八）に最初の詔が降り、皇祐（一〇四九—五三）を経て至和（一〇五四—五五）の初に再度歐陽修、宋祁等に詔して、嘉祐五年夏（一〇六〇）に完成を見たわけで、曾公亮の上表にも「嘉祐五年六月」とある。けだし「皇祐中」とは『郡齋讀書志』の記述に紛れた魯迅の筆誤であらう。「宋嘉祐中」と改むべきである。

『新唐志』子部小說家類云、

燕丹子一卷燕太子。

邯鄲淳笑林三卷

裴子野類林三卷

張華博物志十卷〔隋志〕在子部雜家。

。又列異傳一卷〔隋志〕〔旧唐志〕作魏文帝撰、在雜傳。

賈泉注郭子三卷郭澄之。

劉義慶世說八卷

又小說十卷

劉孝標續世說十卷

殷芸小說十卷

劉齊釋俗語八卷

蕭貢辨林二十卷

劉炫酒孝經一卷

庾元威座右方三卷

侯白啓顏錄十卷

雜語五卷

。戴祚甄異傳三卷

。袁王壽古異傳三卷

。祖沖之述異記十卷

。劉質近異錄二卷

。干寶搜神記三十卷

。劉之遴神錄五卷

。梁元帝妍神記十卷

。祖台之志怪四卷

。孔氏志怪四卷

。荀氏靈鬼志三卷（以上十部、『隋志』『舊唐志』并在史部雜傳。）

。謝氏鬼神列傳二卷〔舊唐志〕在雜傳。

。劉義慶幽明錄三十卷

。東陽無疑齊諧記七卷

。吳均續齊諧記一卷（以上三部『隋志』『舊唐志』皆在史部雜傳。）

* 王延秀感應傳八卷

* 陸果繫應驗記一卷（以上二部『隋志』在子部雜家、『舊唐志』在史

部雜傳。）

* 王琰冥祥記一卷

* 王曼穎續冥祥記十一卷（以上二部『隋志』『舊唐志』并在史部雜傳。）

* 劉泳因果記十卷（『舊唐志』在雜傳。）

* 顏之推冤魂志三卷（『隋志』『舊唐志』俱在雜傳。）

* 又集靈記十卷

* 徵應集二卷（此二部『舊唐志』在雜傳。）

* 侯君素旌異記十五卷（『隋志』『舊唐志』俱在史部雜傳。下略）

唐臨冥報記二卷

李恕誠子拾遺四卷

開元御集誠子書一卷

王方慶王氏神通記十卷

狄仁傑家範一卷

盧公家範一卷盧僕。

蘇瓊中樞龜鏡一卷

姚元崇六誠一卷

事始三卷劉孝孫、房德懸。

劉睿續事始三卷

元結猗犴子一卷

趙自勛造化權輿六卷

通微子十物志一卷

吳筠兩同書一卷

李涪刊誤二卷

李匡文資暇三卷

炙轂子雜錄注解五卷王叟。

蘇鶚演義十卷

又杜陽雜編三卷字德祥、光啓中進士第。

柳氏家學要錄二卷柳瑛。

盧光啓初舉子一卷字子忠、相昭宗。

劉訥言俳諧集十五卷

陳翺卓異記一卷憲穆時人。

裴紫芝續卓異記一卷

薛用弱集異記三卷字中勝、長慶光州刺史。

李玫纂異記一卷大中時人。

李元獨異志十卷

谷神子博異志三卷

沈如筠異物志三卷

古異記一卷

劉餗傳記三卷一作國史異纂。

牛肅紀聞十卷

陳鴻開元升平源一卷字大亮、貞元主客郎中。

張薦靈怪集二卷

陸長源辨疑志三卷

李繁說纂四卷

戴少平還魂記一卷貞元待詔。

牛僧孺玄怪錄十卷

李復言續玄怪錄五卷

陳翰異聞集十卷唐末屯田員外郎。

鄭遂洽聞記一卷

鍾輅前定錄一卷

趙自勣定命論十卷天寶祕書監。

呂道生定命錄二卷大和中、道生增趙自勣之說。

溫舍續定命錄一卷

胡璩譚寶錄十卷字子溫、文武時人。

韋絢劉公嘉話錄一卷絢、字文明、執誼子也、咸通義武軍節度使。

劉公、禹錫也。

戎幕閑談一卷

趙璘因話錄六卷字澤章、大中衢州刺史。

袁郊甘澤謠一卷

溫庭筠乾膺子三卷

又採茶錄一卷

段成式酉陽雜俎三十卷

廬陵官下記二卷

康駟劇談錄三卷字駕言、乾符進士第。

高彥休闕史三卷

盧子史錄卷上。

又逸史三卷大中時人。

李隱大唐奇事記十卷咸通中人。

陳劭通幽記一卷

范攄雲溪友議三卷咸通時、自稱五雲溪人。

李躍嵐齋集二十五卷

尉遲樞南楚新聞三卷並唐末人。

張固幽閑鼓吹一卷

常侍言旨一卷柳珣。

盧氏雜說一卷

桂苑叢譚一卷馮翊子子休。

樹萱錄一卷

會昌解頤四卷

松臆錄一卷

芝田錄一卷

玉泉子見聞真錄五卷

張讀宣室志十卷

柳祥瀟湘錄十卷

皇甫松醉鄉日月三卷

何自然笑林三卷

焦璐窮神祕苑十卷

裴鉞傳奇三卷高駢從事。

劉軻牛羊日曆一卷牛僧孺、楊虞卿事。植樂子皇甫松序。

補江總白猿傳一卷

郭良輔武孝經一卷

陸羽茶經三卷

張又新煎茶水記一卷

封演續錢譜一卷

右小說家類三十九家、四十一部、三百八卷。失姓名二家、李恕以下不著錄七十八家、三百二十七卷。

『大略』はこの條の最初に引いた文の後に『燕丹子』より『侯君素旌異記十五卷』までを列舉し、『新唐志』本文に附した（ ）中の注記を添える。なお○印を附したものが「志神怪者十五家一百十五卷」であり、*印が「明困果者九家七十卷」である。前者については二版から三十年集版に至るまで、みな「一百五十卷」とするが、これは趙景深「関于『中國小説史略』」（いま『中國小説叢考』所收一九五〇 齊魯書社）によって五と十の顛倒を指摘された。後者について

は、百衲本、校點本『新唐志』は「王琰冥祥記一卷」とするが、八史經籍志本は「十卷」に作り、監本、汲古閣本、殿本等いずれも「十卷」に作る。魯迅は「十卷」本で計算しているので「七十卷」となる。これは『大略』がすでに「十卷」とする。なお、「劉涓子因果記」を『大略』は「劉涓子」とするが、八史經籍志本はまさしく「劉涓子」に作る。

18 元修『宋史』、亦無變革、僅增蕪雜而已

八十七

『宋史』藝文志子部小說家類、凡三百五十九部、一千八百六十六卷を收む。

19 明胡應麟、以至『省心』之類是也

八十九

『大略』一は胡應麟の説を引かない。

『少室山房筆叢』卷二九、九流緒論下云、小説家一類、又自分數種。一曰志怪。搜神、述異、宣室、西陽之類是也。一曰傳奇。飛燕、太眞、崔鶯、霍玉之類是也。一曰雜錄。世說、語林、瑣言、因話之類是也。一曰叢談。容齋、夢溪、東谷、道山之類是也。一曰辨訂。鼠璞、雞肋、資暇、辨疑之類是也。一曰箴規。家訓、世範、勸善、省心之類是也。談叢、雜錄二類、最易相紊。又往往兼有四家。而四家類多獨行不可攬入二類者。至於志怪、傳奇、尤易出入。或一書之中、二事並載。一事之内、兩端具存。姑舉其重而已。

小説子書流也。然談說理道、或近於經、又有類注疏者。紀述事迹、或通於史、又有類志傳者。他如孟啓本事、盧瓊抒情、例以詩話文評附見集類。究其體製、實小說者流也。至於子類雜家、尤相出入。鄭氏謂古今書家所不能分有九、而不知最易混淆者小說也。必備見簡編、窮究底裏、庶幾得之。而冗碎迂誕、讀者往往涉獵、優伶遇之、故不能精。

『史略』は「卷二八」とするが、これは筆誤だろう。

20 清乾隆中、以至而所論列則襲舊志

八一三

『大略』一云、清乾隆中、撰四庫全書總目提要、分小說爲三派。

『四庫提要』卷一四〇、子部小說家類序云、張衡西京賦曰、小說九百、本自虞初。漢書藝文志載虞初周說九百四十三篇、注稱武帝時方士、則小說興於武帝時矣。故伊尹說以下九家、班固多注依託也。然屈原天問雜陳神怪、多莫知所出、意卽小說家言、而漢志所載青史子五十七篇、賈誼新書保傳篇中先引之、則其來已久、特盛於虞初耳。以下魯迅引く所に同じ。

21 然『山海經』『穆天子傳』、以至而史部遂不容多含傳說之書

九一五

『大略』一云、山海經舊皆隸史部地理、穆天子傳隸起居注、至是又以神怪恍惚而黜之。其說云、書中指山海經序述山水、多參以神怪。中略按以耳目所及、百不一真、諸家以爲地理書之冠、中略實則小說之最古者爾。以下に次に引く『四庫提要』の『穆天子傳』案語を續ける。なお「其說云」以下は「山海經」の「提要」の文である。

『四庫提要』卷一四二云、穆天子傳六卷（提要を略す）案穆天子傳、舊皆入起居注類。徒以編年紀月、敘述西遊之事、體近乎起居注耳。實則恍惚無徵、又非逸周書之比、以爲古書存之可也。以爲信史而錄之、則史體雜、史例破矣。今退置於小說家、義求其當、無庸以變古爲嫌也。

22 至于宋之平話、以至而史志皆不錄

一〇一三

『大略』一云、至于唐之傳奇體記傳、宋以來之譚詞小說、史志皆不取、蓋俱以猥鄙荒誕而見黜也。

23 惟明王圻作『續文獻通考』、以至『水滸傳』

一〇一三

王圻『續文獻通考』卷一七七、經籍考傳記類云、水滸傳 羅貫著、貫字本中、杭州人。編撰小說數十種、而水滸傳叙宋江事、奸盜脫騙機械甚詳、然變詐百端、壞人心術。說者謂子孫三代皆啞、天道好還之如此。『三國志』の名は該書に見えない。

『百川書志』卷六、野史云、三國志通俗演義二百四卷。晉平陽侯陳壽史傳、明羅本貫中編次。據正史、採小說、證文辭、通好尚。非俗非虛、易觀易入、非史氏蒼古之文、去贅傳詼諧之氣、陳敘百年、該括萬事。忠義水滸傳一百卷 錢塘施耐庵的本、羅貫中編次。宋寇宋江三十六人之事、并從副百有八人、當世尚之。周草窗癸辛雜志中具百八人混名。

²⁴ 清初錢曾作『也是園書目』、以至宋人詞話『燈花婆婆』等十六種

一〇十四

魯迅『關於小說目錄兩件』『全集』第八云、別有清錢曾所藏小說目二段、昔從『也是園書目』鈔出、以其可知清初收藏家所珍度者是何等書、并綴于末。一九二七年七月三十日之夜、魯迅于廣州東堤寓樓記。

乙 也是園書目

宋人詞話

『燈花婆婆』、『種瓜張老』、『紫羅蓋頭』、『女報冤』、『風吹轎兒』、『錯斬崔寧』、『山亭兒』、『西湖三塔』、『馮玉梅團圓』、『簡帖和尚』、『李煥生五陣雨』、『小金錢』、『宣和遺事』四卷、『煙粉小說』四卷、『奇聞類記』十卷、『湖海奇聞』二卷

通俗小說

『古今演義三國志』十二卷、『舊本羅貫中水滸傳』二十卷、『梨園廣記』二十卷

迅案。詞話中之『錯斬崔寧』及『馮玉梅團圓』兩種、今見于江陰繆氏所翻刻之宋殘本『京本通俗小說』中。錢曾所收、蓋單行本。

²⁵ 然『三國』『水滸』、嘉靖中有都察院刻本

一〇十六

周弘祖『古今書刻』上編云、都察院……三國志演義、水滸傳……

魯迅が「嘉靖中」とした根拠は未詳。あるいは周弘祖が嘉靖三十八年の進士（『明史』二二五本傳、また葉德輝刻『古今書刻』序）であることからの推測か。